

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑥

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

「時期尚早」という言葉

はじめて自分のことを話した宮崎での講演で、もうひとつ学んだことがありました。それは「時期尚早」という言葉が持つ意味でした。確かに物事を行うときにタイミングをはからなければならないことはよくあります。しかしながら、人権の文脈で使われるときはどうやら意味合いが違うらしいと気づきました。

わたしが自分自身がトランスジェンダーであることがわかったその2年後、トランスジェンダーとして生きようとした時、ほとんどの人から「やめておけ」というアドバイスをされました。ある人から「お前のことなんて、誰も認めていない」と言われたこともありました。とてもではありませんが、直接その人に反論する力はありませんでした。別の人に「認めるか認めないかではない。『わたし』は存在しているのだから、それは認めなければならないことだ」と、なかばグチのように言いました。すると、『認めなければならない』なんて傲慢だ」と言い返されました。

時は1999年です。確かに「性を変えて生きる」ことはまだまだ一般的ではありませんでした。いわば「時期尚早」だったのでしょう。

さらに、こんなこともありました。2007年、わたしは女性教職員のとりまとめをしている教員に「女性ロッカールームにわたしのロッカーを置かせてもらえないだろうか」と相談しました。当時のわたしは毎日走っており、着替えをしなければなりません。ところが男性ロッカースペースにロッカーがあったため、しかたなく放送室で着替えていたのです。わたしの相談に対してその教員は「みんなにはかってみよう」と、女性教職員の集まりをひらいてくださいました。その場に参加していた女性教職員は全員OKという答でした。ところが、参加していなかった教員から「昔の土肥さんを知っているのしんどい」という答えが返ってきて、結局断念しました。おそらくわたしの希望は「時期尚早」なものだったのでしょう。それそのものは「しかたない」と思いましたが、気になったのは、そこに「古い考え方もしれませんが」と

いう言葉が添えられていたことでした。しかし当時のわたしは、この言葉を単なる「言いわけ」としか認識できませんでした。

このような経験を繰り返すうちに、いつしかわたしは『人権』は、それを多くの人に人権と認められてはじめて人権になるらしい」と考えるようになりました。つまり、「ある課題があったとしても、多くの人認めるまでは人権にはならない」ということです。

しかしこれは、歴史的には当然のことだと思います。例えば、江戸時代は身分によってわけへだてがあるのがあたりまえのことでした。したがって、賤民が差別されるのもあたりまえのことでした。あるいは、1950年代のアメリカでは、バス車内において、黒人が運転手の指示で白人に席をゆずるのはあたりまえのことでした。その時、もしも「違う」と言ったとしても、それは「時期尚早」であり、「新しすぎる考え」であったのだと思います。「時期尚早」にしる「古い考え方」にしる、既存の枠の中にある自分の価値観を正当化するために用いられるのではないかと思います。

最初の話にもどります。講演会を企画された宮崎県同和教育研究協議会事務局長のNさんは、実は宮崎県教育委員会に学習会への後援申請をしていました。しかし、県教委の返事は「時期尚早」でした。その返答を聞いたNさんは激怒されました。そして「意地でも人を集める」と決意され、ありとあらゆる機会を使って宣伝をされました。その結果が、先号に書いた廊下にまで人が座る300人の参加だったのです。

人権の文脈において使われる「時期尚早」という言葉に込められた意味は、「その課題は人権ではない」ということです。そして例えば、江戸時代であれば平民化を求めた渋染一揆のように、あるいは1950年代アメリカであれば運転手の指示に従わなかったローザ・パークスのように、「時期尚早」な行為は処罰の対象となりました。しかし、このような「時期尚早」な行為によって「あたりまえ」を変えてきた人びとが、ある課題を人権と認めさせてきたのだと思います。